高等学校の部　最優秀賞

看護とは

愛国高等学校 衛生看護科　三年
野口明日香

私は幼いころ看護という職業に憧れていた。憧れだった看護を、実習という貴重な体験を通して実際の看護に触れることができた。

高校一年生の時、看護という専門教科に興味津々で、何を学ぶにも楽しくて仕方がなかった。自分の思っていた通りに学習が進んでいった。

高校二年生では専門知識も少しずつ増え、戴帽式や病院実習があるので、常に緊張感を持ちながら学習に取り組むことができた。十一月下旬の戴帽式ではナースキャップを戴き、ナイチンゲール誓詞を胸に刻むと共に白衣に身を包み実習へむけて気を引き締めることができた。二年生の基礎実習では、主に技術を中心に学んだ。初めての病院、初めての患者様、初めての医療というものを見学させて頂いた。この実習で私は「生命の尊さ」を学んだ。それは、私の受け持たせていただいた患者様の「死」からだった。

その患者様とはわずか一週間ほどしか関わることができなかった。とても優しい方でたくさんの話をしてくださった。例えば、若かりし日の恋の話、戦争で苦労なさった話、入院される前、趣味で日本舞踊をなさっていたことなど様々伺った。清拭や洗髪、血圧測定などを提供していく中で少しずつだったが患者様と信頼関係を築き始めていた矢先に患者様の容態が悪化した。私は何もできず、ただどうか戻ってほしい、またあの笑顔で話をしてほしいと祈るだけだった。その願いも空しく、患者様は永眠された。その瞬間目の前が真っ暗になった。何も考えられず茫然と立ち尽くしていた。でも涙は出なかった。きっと現実を受け入れられていなかったのだと思う。

お昼の休憩中食事を取りながら自然と患者様のことを思い出して、我慢していたものが一気に崩れ、あとからあとから涙があふれ止まらなかった。「どうして私が受け持たせていただいた患者様なのだろう。どうして助からなかったのだろう。どうして私は何もできなかったのだろう。」とそのことばかりが頭の中をかけ回っていた。

帰りの電車の中で自分は患者様に何ができたのだろうか。辛い闘病生活の中で少しでも支えになれたのだろうか。何もできない自分が情けなく、また同時に看護という職業に初めて疑問を持った。生まれてくる命があれば消えていく命がある。その場面に立ち会わなければ避けては通れない看護の宿命をこれから私は乗り越えていけるのだろうか。自問自答の日々が続いた。そんな時、先生が「看護を勉強するものとして、そんな場面に立ち会えた事を素晴らしいと思わない。」と心を込めて語りかけてくれた。その言葉が私をまた憧れだった看護の勉強を続けたいという気持ちにさせてくれた。確かに人の死に向き合うのは辛くて苦しいことではあるが、その場面に立ち合える、その患者様の最期を一緒に過ごすことが

できる、そんな職業はそうほかにはない。人は生まれ、そして、死んでいく。ゴールがあるからこそ一人一度の人生を大切に生きていくことができるのではないかと高校二年の基礎実習で気づくことができた。

そして、高校三年生の成人・老人介護実習が始まった。基礎実習とは違い、より深く疾患と向き合い、患者様を理解した上で患者様にとって今何が一番必要なのかを考え、看護を展開していかなければならない。自分の勉強の未熟さを心底実感するとともに患者様に対してはより深く関わることができた。

私が苦戦した病棟が消化器外科だった。手術前・手術当日・手術後と看護の仕方や注意する点が違うので勉強が追い付かず重要な観察点を見落としていたこともあった。また、手術を控えた患者様を受け持たせて頂くことによって心理面についても学べた。一見不安がないように見えた患者様が本当は不安を抱いていて、誰にも言えないでとても辛い思いをしていた。私から「不安なこと、心配なことはありませんか。」などと質問しても答えてもらえなかった。手術室へ向かうベッドの中で患者様の手を握ると突然涙を流して泣いていた。言葉には出さないが怖い、苦しいと言う気持ちが涙としてでてきたのがわかった。いざというとき、人の手は安心感を与えられる最高の宝物ではないか、とその時ふと感じた。同時に相手の気持ちもわかってしまうので、手から伝わる温もりで人間と人間同士が繋がる。だから手は本来温かくて、優しいものでなくてはならない。

私はまだ十七歳で経験も浅い。「看護とは何か。」と言われるとまだ正直答えられない。でも一つだけ言えることは、病気と闘っている患者様は強いということである。自分の病気を受け入れ治すために必死でがんばっている。その姿から看護師は勇気をもらい、患者様に元気を与えられるのだと思う。一方通行では看護は成り立たないのだから。お互いが通じ合い初めて看護になる。人と人との繋がりこそが看護の原点ではないか。

生き甲斐

愛国高等学校 衛生看護科　三年
山梨　みなみ

私は三年の一学期から病院実習へ行きました。私にとって毎日が新しいことの発見で、とても充実していました。その中で一つ、気になったことがあります。それは「生き甲斐」についてです。病院実習に行かなかったらこのことについて考えることはなかったと思います。

私は三クール目の療養病棟で、初めてターミナル期の患者様を受け持たせていただきました。この方は肺癌で、その癌が脳に転移するという転移性脳腫瘍も発生していました。そのため、右麻痺があったり、言語の表出に障害があったり、自力で体動ができず褥創ができたりしていました。何をするにも看護師や助手の手を必要としていました。

私は「この患者様には、どのようなケアが必要だろうか」とこの患者様に合ったケアを導き出すために、カルテからの

情報収集や、直接看護師に患者様について聞き出したりしました。こうして集めた情報から、足浴をしたり、清拭をしたり、褥創悪化を予防するためにクッションを作ったりしました。こういったケアは患者様にとって必要なものでした。しかし、もっと必要なのは観察という点でした。ターミナル期で、いつ呼吸が停止してもおかしくない状態だったからです。私はケアをしながらも、またそれ以外の時間もなるべく患者様の所へ行き、体の隅から隅まで観察しました。毎日毎日観察していて、私が一番感じたことは「この患者様にとっての生き甲斐は何だろうか」という点でした。勿論、体や呼吸に異常があったらすぐに看護師に報告していました。ですが、それでも私は「生き甲斐」についての方が気になっていました。私の呼びかけに対しては、首を動かして反応してくれていましたが、患者様は自分の言いたいことを口に出すことができませんでした。声が出せたとしても「アー」としか言えず、私には聞き取ることができませんでした。患者様の訴えたいことを聞き取ってあげられないのがとても悔しかったけれど、もっと悔しい思いをしたのは患者様だと思います。人と会話ができない。自分一人では動くことができない。一日中ベッド上で過ごしている。食事が好きであったのに、体調が急変してしまったため絶食となった。患者様の立場になってみると、失礼だと思いながら「一日の中に楽しみはあるのかな」「何を思って過ごしているのだろう」と思ってしまいました。

そこで私は沢山のことを考えました。まず、「生き甲斐とは何か」ということです。私が考える生き甲斐は、夢や目標を持って生活することであったり、人の役に立てることをして喜んでもらえたり、社会に貢献することであったり、努力して、手応えを感じたりすることだと思います。つまり、生きるはりあいや生きていてよかったと思えるようなことだと思います。ならば、私の生き甲斐は何だろうか。次にこのことを考えました。私の生き甲斐は、将来の夢である看護師になるために勉強することや実習などを通して、沢山の人と関われるということです。どちらも決して楽なことではないけれど、幼い頃から抱いていた看護師への憧れを、憧れで終わらせたくないという気持ちと、自分で決めた看護への道を諦めたくないという気持ちからいくら大変であっても、やり抜きたいと思っています。これが私の生き甲斐だとはっきり言えます。それでは私が受け持たせていただいた患者様の生き甲斐は何だろう。他の患者様方の生き甲斐は何だろう。実習中にこんなことがありました。七月七日は、七夕ということでロビーには大きな笹の葉があり、短冊には患者様方の願い事が書かれていました。その中で一つ、とても印象的なものがありました。「孫に会いたい」とたった一言だけ書かれた短冊でした。よく見ると、他の短冊にも似たようなことが書いてあるものがありました。「七夕の日に孫に会うことを願っているなんて」と思うと、とても心が痛みました。静岡で寝たきりとなっている私の祖父も、孫の私に会いたいと願っているのだろうかと思うと涙が出そうでした。患者様の中には、拡大した孫の写真を飾っている方もいました。そこで私は思いました。夢や目標を持って生活したり、人の役に立つことだけが生き甲斐ではないのではないか。患者様にとってみた

ら、人との関わりが生き甲斐に繋がっているのではないか。人と人とが触れ合うことで、嬉しさや楽しさを感じることが生き甲斐ではないかと……患者様のもとに孫や家族がお見舞いに来るとします。患者様は孫たちの元気な姿を見て喜びを感じる。また孫たちはおじいちゃんやおばあちゃんの喜ぶ姿を見て、もっと頑張ろうとか、また会いにきてあげようと感じる。このように互いに励まし合うことができたら、とても素敵なことだと思います。お見舞いに来るのが孫ではなくても、友人であったり、いつも近くにいる医者や看護師でも同じことが言えると思います。今だから考えられることですが、私が受け持たせていただいていた患者様が、私の呼びかけや手を握ったり、擦ったりした行動に対して何かを思ってくれていたら嬉しく思います。

今回の実習を通して、初めて「生き甲斐」について考えました。最終的な結論は「生き甲斐とは、人との関わりの中で生まれるもの」というものでした。勿論、生き甲斐は一人一人違うし、考え方も違うと思います。ですが、このことは患者様のみならず、私にも言えることだと思ったのです。今回のことで改めて患者様との関わりがいかに大切なものかわかったような気がします。将来、臨床で働くようになってからも、このことを忘れずに、一人一人の患者様のことを考えて、お話をしたり、触れ合ったりして、言葉で言い表さなくても、私の思いが患者様へ伝えられるような看護師になりたいと思います。

高等学校の部　優秀賞

二度目の高校生活

東京都立第四商業高等学校 定時制
商業科　四年
茂田井五枝

今から四年ほど前「母さんは四月から第四商業に通うよ。」と言ったら、「エッ」とビックリして、「夕食の支度は？」と、いつも帰りの遅い子供が急に言いだした。

「突然、何でまた勉強しようと思ったの。」と聞かれた。実は高校の普通科を卒業後、六十歳の定年まで働いていた職場で、最後に異動した課が年度ごとの報告書を作成する仕事だった。システムプログラムができているので、決算書、合計残高試算表、損益計算書などの数字を所定の場所に入力するだけで、後はコンピュータが処理し、入力ミス、資料ミスの時は問い合わせをしたり、訂正したりして報告書ができあがる。言葉もわからず入力した仕事のことを少しでも理解できたらと、簿記の専門学校に行きたいと考えていたが、三人の子供を育てながらなので実行できないまま定年がせまってきた。すると、娘の卒業した高校の校長先生から定時制の成人入学のことをお聞きした。私は急に考えつき、第四商業に行こうと思い、電話で学校に問い合わせると、親切に「何もできなくても、学ぶという気持ちがあればきて下さい。」と返事が返ってきた。飛びついて定年と同時に第四商業高校定時制に入学する決心をし、実行した。

その結果、理解できずにいた簿記の勉強だけではなく、一般科目も勉強、十五歳のクラスメートと机を並べる高校生になった。

初めに決心したことは、休まず通学しようということだった。一般企業に勤めていなかったので、簿記用語の商品、仕訳などの言葉からして何を言っているのかチンプンカンプンだったが、くり返しくり返し教えて下さる先生の熱心な授業で少しずつわかってきた。そのおかげで一年で簿記能力検定の四級、二年で三級、三年で二級に合格した。三級、二級は一度で合格できずに二度も受験した。クラスメートの半数は、一回で合格していた。頭の回転の悪い私は何度も何度も先生が指導して下さった。もうやめたいと思ったが、合格している人もいるのだからと気をとりなおし、また勉強の毎日でやっと合格。先生には心から感謝している。

日本語ワープロ検定は一年で四級に合格。ところが二年、三年と二回も三級に不合格になってしまった。原因はタイピングの速度が遅かったことだ。先生方は自信をなくしている私に「今度も受験するよね。」と励まして下さって、ついに、四年になって三級に合格。何と三百字以上という合格ラインをやっと三文字多い三百三文字での合格だった。時間のゆるす限り早く登校して練習の日々だった。「合格」という掲示を見て涙がでるほどうれしかった。エクセル検定の三級、日本語漢字能力検定の四級、三級にも合格した。

今まで六十三年、生きてきて、この様に沢山の資格を取ることに挑戦し努力したことはなかった。先生方の励ましで何度も何度も挑戦の日々だった。途中でくじけずに頑張り続けることができたのも、先生方があきらめず励まして下さったおかげだ。

商業高校の良さというのは、この様に多くの資格試験に挑戦できることだと入学してわかった。

この四年間、孫が誕生したり、その孫を保育園に送ったり、病気の時には一日中看病したりした。また末娘がケガで入院し、手術後二ヶ月半、毎日の病院通いをしたりした。それでも休まず通学した。その結果、一年から三年まで続けて皆勤賞をいただいた。

六十歳を過ぎてから学び直している私は、教えて下さる先生方や若いクラスメートが親切にして下さることに感謝し、学べる環境に協力してくれる子供達や亡き夫にも感謝して三月の卒業を目指していきたい。

信頼関係を築く

愛国高等学校　衛生看護科　三年
大河莉紗

幼い頃から、看護師になりたいと思い、高校から衛生看護科に入学しました。看護師の勉強を一年生の頃から専門的に学び、今、病院実習という場で、実際に患者様と触れ合い、沢山の勉強と体験をさせていただいています。実習を通して、看護師というものが現実的に感じられ、毎日がとても充実しています。その実習中、私は、一生忘れることのない患者様と出会うことができました。

五月から病院実習が始まって三クール目、私は脳神経外科で脳疾患により入院された患者様を受け持たせて頂きました。一クールの実習期間は三週間。その短い間で、少しでも多く、患者様の手助けができるようにと、挨拶に向かいました。しかし、患者様は意識障害、言語障害があり、何も話してはくださらず、目もあわせて下さいませんでした。私が話しかけても、無反応で、沈黙だけが静かに続いていくだけです。患者様のベッドサイドにいっても、コミュニケーションをとることができません。また、患者様は片麻痺があり、患者様自身で身体の向きを変えたりすることができない状態でした。

言葉のやりとりができないというのは、患者様が、今、何を求めているのか、何を思っているのかが分からず、とても困りました。そこで私は、朝の挨拶やオムツ交換などのケア時だけでなく、ナースステーションにいる時間を最低限にし、一日の大半を患者様のベッドサイドで声かけをすることにしました。まず、お名前を呼び、自分から患者様と目を合わせ、笑顔で挨拶や今日の天気、患者様の状態など、沢山話かけをしました。

一週目は殆ど発語がなく、うなづき程度でした。けれど、私は声かけを続けました。そして二週目、いつものように、朝、患者様の所へ挨拶に行きました。すると患者様が

「お…はよ…う。」

とゆっくり挨拶をして下さいました。私は、驚きと喜びで胸が一杯になりました。初めて患者様と言葉で交わした挨拶でした。

その後、患者様の回復はとても早くなり、言えなかったご自分の名前も、少しつまるものの言えるようになり、簡単な質問に関しては、返答することが出来るようになりました。

そして二週目の最終日、いつものように患者様の歯磨きをし「お疲れ様です。」と声をかけると、患者様が何か言いたそうにしています。

「どうかなさいましたか？」

と、近くに行くと、小さな声で

「ありがとう。」

と言われました。胸が熱くなりました。私は

「ありがとうございます。片付けてきます。」

と言い、すぐに病室を後にしました。嬉し涙をこらえるのに必死でした。その患者様の言葉は私の励みとなり、何があっても頑張ろう。そう思いました。

三週目になると患者様は、少し日常会話が出来るようになりました。麻痺に対するリハビリも、高度なものへと変わり、自身での体位変換が出来なかった患者様も起立動作の練習をするようになりました。

そして最終日、私達が帰る時間になり、私は患者様に挨拶に行きました。その日はご家族の方もいらしていて、今日で最後であることとお礼をし、患者様に

「今日で最後なんです。三週間ありがとうございました。これからもリハビリ頑張って下さいね。」

と伝えると、患者様の目から涙がこぼれました。私は目頭が熱くなりました。涙を堪えて

「泣かないで下さい。本当にありがとうございました。」と精一杯の笑顔でもう一度言うと、患者様が私の手を強く握り

ました。

「ありがとう。」

そう言われた気がしました。私はもう涙を止めることができませんでした。自分はほんの少ししかできず、失敗したことも多々ありました。ですが、私が行ったことの中で何か一つでも患者様の手助けをすることができたんだと、本当に嬉しく思いました。

今回、私は多くのことを学びました。まず継続することの大切さです。患者様の言語障害に対してのケアは、すぐには効果がでませんでした。しかし、毎日継続することで、最終日には、日常会話が少し出来るくらいに患者様は回復していきました。日々の積み重ねの大切さを実際にケアを通して実感することができました。

次に、患者様の回復過程を見ることができました。初日の頃と最終日では患者様はめざましく変わりました。三週間という短期間の中で、こんなに顕著な回復過程を見たのは初めてで、人間の回復能力の強さを感じることができました。

そして、何より患者様と看護師との信頼関係の大切さを改めて知ることができました。患者様が、最後の日に涙を流し手を握って下さったのは、毎日の関わりの中で少しずつ、患者様との関係が深まり信頼関係を築くことができたからだと思います。

看護は人と人との関わり合いです。私は、今回の実習でその大切さをとても感じました。私は、今回の実習を生かし、患者様から学んだこと、患者様との思い出を忘れず、これから深く患者様に関わり、気持ちを組みとれるような看護師となれるよう頑張っていこうと思います。そのためにも、これからも沢山勉強をし、経験を積んで行きたいと思います。挫けそうになった時は、患者様の言葉と手の温かさを思い出し、乗り越え、最後には笑顔になれるよう、日々努力していきたいです。

高等学校の部　佳作

植物のある暮らしを多くの人に

東京都立農芸高等学校　園芸科学科　三年
鴛尾　亜衣子

私は農芸高校で様々な植物とふれあってきました。その中でも、所属している花部の活動としてキクの管理をたくさんやりました。キクの管理とは、主に摘心といって芽を摘んで枝数を増やす作業をします。他にも鉢がえや追肥など、することはたくさんあります。キクは夏の間が成長盛んなので、夏休みはほとんど毎日学校に来て世話をしていました。そのため、暑さや疲労でバテてしまうこともあり、作業が同じことの繰り返しが多いので、面倒くさくなってしまうこともありました。しかし、開花した花の可愛らしさを見たり、展示後の喜びを感じたりすると、がんばってよかったと思います。その達成感は、やった人にしかわからない嬉しさなのだと思います。植物は自分がこまめに手をかけて育てた分だけとてもきれいに丈夫に育ってくれます。自分の努力の分だけ、植物は返してくれるのです。

授業でも多くの植物について学びました。暑さに強い耐暑性のもの、寒さに強い耐寒性のもの、そして乾燥に強い耐乾性のものなど、特徴は様々です。例えば、水はあまりやらなくてもよいとされているサボテンでも、原産地によっては普通の草花と同じように水をやってもよいということを学びました。サボテンは分布地域がとても広いので、種類によっては生育管理がまったく違うこともあるそうです。私はそれを聞いてとても驚き、知らないことはたくさんあるんだと改めて実感しました。知らなかったことを知っていくたびに、植物のことが好きになっていきました。そして好きになっていくたびに、もっと知りたい、もっと勉強したいと思うようになりました。くわしく知れば知るほど、植物のある暮らしが楽しくなっていくのです。

農芸高校は地域の園芸即売会などで、学校で育てた草花を販売することがあります。そのスタッフとして何回か参加する機会がありました。そしてたくさんのお客さまと出会い、消費者となる側の人達はたいていが植物の育て方をよく知らないことがわかりました。どの植物に対しても、「とにかく日光に十分あてて、水をたっぷりやればよい」と思い、管理を一緒にしてしまう人も少なくないのです。

ある時、一人の男性がランを見ていたので話しかけてみました。その人は昔、ランを買ったことがあるそうですが、育て方がいま一つわからなくて、結局枯らしてしまったそうです。だからランは好きなのだけれど、買うのがためらわれると言われました。その人が見ていたランは私たちが寄せ植えしたもので、先生からそのランの育て方や特徴を習ったばかりだったのです。実は、ランは管理が難しいといわれているけれど、意外に丈夫で、育て方もいくつかのポイントに気をつければ簡単なのです。それを説明するとその人はランを買って、うれしそうに「ありがとう」と言ってくれました。

またある女性は、霜にあたって枯らしてしまった植物があるらしく、「これはどういう場所で育てるのがいいのかしら」と質問されました。私はわからなかったので先生に聞いてしまいました。答えることができなかったのがとても残念で、悔しかったです。草花を販売する、という仕事をしているのであれば、お客さまの質問はすぐに答えられなければならないと、私は思うのです。

育てる場所の環境に合った植物を選ぶことは一般の人にとっては、難しいと思います。育て方がわからなくて欲しい植物があっても買うのをためらったり、枯らしたりしてしまうのは、すごく悲しいことです。植物の特徴をよく知っていて、育て方を教えられる人が身近にいれば、もっと気軽に安心して暮らしに植物を取り入れる人が増えると思います。植物は環境と育て方さえ間違えなければ、すくすく育ってくれます。成長が目に見えてわかるので、毎日がとても充実したものになります。植物を上手に育てることができた達成感は私たちの心を優しい気持ちで満たしてくれます。だから私は、植物のある暮らしを多くの人に知ってもらいたい。そのために、もっと勉強をして、植物のある暮らしの楽しみ方をたくさんの人に伝えられるような職業につきたいと思っています。

笑顔で元気

愛国高等学校 衛生看護科　三年
芝田悦子

病院実習二クール目の初日、私は新しい患者様にお会いすることが楽しみでもあり、不安でもありました。私の受け持たせて頂く患者様について事前に情報があって、患者様は麻痺があり寝たきりであるということでした。私は寝たきりは重症であるという思いがあった為、自分に出来ることはあるのかと患者様に会う前から不安でした。

初めは一日目ということで病棟内を案内してもらいました。その時、ふと見た病室の一番手前のベッドの患者様と目が合ったように感じました。何故か分かりませんが、その患者様が気になったのです。いよいよ、指導者さんに患者様を紹介して頂く時間となりました。病室に行くと、そこはさっき気になった患者様がいる病室でした。そして、指導者さんが声をかけたのは、一番手前のベッドのあの患者様だったのです。指導者さんが説明をすると患者様は顔をこちらに向けてくれました。緊張しながら、私は自己紹介をしました。「あれ…反応がない。」と思ったのが正直な気持ちでした。患者様は喋ることをせず、また違う方向を向いてしまったのです。その後、病室を出た所で指導者さんから患者様はあまり反応がないから、コミュニケーションをとるのは大変かもしれないということを教えて頂きました。私が、今まで受け持たせて頂いた患者様はお話を沢山して下さる方だったので、今までの患者様とは違う状況に戸惑ってしまいました。その後、情報収集を兼ねてお話をするため、病室へ行きました。患者様の横に行き、

「こんにちは」

と言うと、顔を向けてはくれるのですが、喋ることはありませんでした。聞きたい話を質問してみるのですが、あまり反応がなく答えは返ってきませんでした。実習中に書かなくてはいけない記録には、入院前のことなどを書く欄があります。カルテには書いていないことなので自分で聞かないといけません。私は、どうしたら良いのか分からず、病室を出て学生の控え室へ戻ってしまいました。この時間は、どの学生も患者様とお話をしているため誰もいませんでした。今頃、みんなは情報収集をしているのかと思うと、みんなに遅れをとっているように思い、一人で焦りを感じていました。その後も何度か病室に行ってみたのですが、患者様と上手くコミュニケーションがとれずに、一日目が終わってしまいました。

二日目の朝、私は環境整備をするために患者様の病室にいました。そこに、看護師さんが来て患者様に挨拶をしました。その時、患者様は笑顔で

「おはようございます。」

と答えていたのです。私は、患者様の初めて見せた笑顔に驚きました。それと同時に、看護師さんの声掛けの工夫について気がつくことがありました。看護師さんは、患者様の手を握りながら目を見て笑顔で挨拶をしていたのです。それを見た時に、自分に足りないものが少し分かった気がしました。

私は、患者様から情報収集をしなくてはいけないという気

持ちがあった為「会話」をすることにこだわってしまい、話が続かないと気まずくなって、病室から出ていってしまうことがありました。そして、どうすれば会話が成り立つのかということばかり気にしていたのです。そのことに気付いた私は、看護師さんの話し方を応用して患者様の手を握りながら話しをするようにしました。また、反応がなくても患者様の傍にいて話し掛けました。話す内容は質問だけでなく、その日の天気や出来事など報告するような感じで話し掛けていました。ときには、ただ傍にいて手を握っているだけの時もありました。

そんなある日、いつものように患者様に朝の挨拶をすると、以前、看護師さんにしていたように笑顔で挨拶をしてくれました。

それからは、私の顔をみると何も言わなくても笑顔をみせてくれるようになりました。また、報告のようにいっていた声掛けにも答えてくれるようになったのです。これは、患者様と接する時間を多くしたり、声掛けの工夫をしたことで患者様も心を開いてくれたからだと思います。

ケアや看護師さんへの報告が不十分であり、指導者さんから、ご注意を受けて私が落ち込んでいた時に病室に行くと、いつも患者様が笑顔で迎えてくれました。患者様の笑顔は、私に元気を与えてくれ、頑張ろうという気持ちにしてくれました。患者様が笑顔でいると私も自然と笑顔になれるのです。

初めの頃は、患者様とのコミュニケーションに戸惑い、病室に行くことが少なかったのですが、最後には患者様の病室に行くことが楽しみとなっていました。

私は、病院実習を通して、コミュニケーションは会話することだけではないということを学ぶことが出来ました。また、患者様と接する時間を長くしたことで、患者様も心を開いてくれ、自然に会話することが出来るようになったのだと思います。

そして、笑顔は沢山の人に元気を与えることが出来ると思います。私は、いつでも笑顔で周りの人達に元気を与えられる看護師を目指し、これからも沢山のことを学んでいきたいと思っています。

看　護　観

愛国高等学校　衛生看護科　三年
武　笠　若　菜

私は、高校の衛生看護科三年生です。現在病院で実習をさせて頂いています。

二年半前に現在の高校の衛生看護科に入学しました。その頃は、まだ憧れと理想だけで期待に胸を膨らませていました。その時に思い描いていた看護師像は、優しく温かい雰囲気を持ち、世間でよく言われている様な「白衣の天使」という様なイメージでした。胸の奥にそんな思いを抱きながら、一年生、二年生は学内での実習や机上での学習に励みました。そして、三年生になり、病院という看護の現場で学ぶことができ幸せに思います。

病院実習が始まる前は、正直、期待よりも不安の方が遙か

に大きく、精神的にも自分で自分を追い込んでいました。この時には理想もイメージも全て吹きとんでいました。実際に病院実習が始まると、緊張感があり、常に気を張っています。言葉遣い・動作・発言・身だしなみなどにも普段の生活とは異なり、病院という場に相応しいものが要求されています。これが実際の現場なのだなと思いました。学校で講義を受けているときには全く理解できなかったこと、机上では掴めなかったことなども自ら経験をすることによって理解でき、さらに新しいものも見えてきています。

それと同時に自分自身の愚かさにも気づかされます。何でこんなことが出来ないのか、何故あの時気づかなかったのか、どうして勉強していなかったのかなど反省することばかりの毎日です。教員や指導者のご指摘は、厳しくも、私たち学生の為になることばかりです。しかし、学ぶためには、教員や指導者の方だけではなく、一番の先生となって下さっているのが、患者様です。

私が、初めて病院という場で学んだときのことです。ある日、一人の患者様が亡くなられました。私は、ナースステーションにいたため、心電図が停止したのを何となく感じていました。その時、教員の方に「エンジェルケアに立ち会わせて頂く？」と聞かれました。エンジェルケアとは死後処置のことです。一瞬、頭の中は真っ白になりました。学内での講義で講師の方がエンジェルケアについて、体験談をお話して下さったことを思い出したりしました。始めの「怖い」という思いは、やがては大きな不安に変わりましたが、立ち会わせて頂くことになりました。

私たちは病室の端から見学をすることになりました。この方は、死後、少々時間が経ってしまっていたために口を閉じさせることができませんでした。まず、ご家族の方に温かいタオルで顔を拭いて頂きました。次に、身体の中に残っているものをかき出し、身体を全て拭き綺麗にします。全身を拭き終えたら鼻や口などから綿を詰め、体内の空洞を埋めていきます。その後、着替えを済ませ、顔を綺麗に化粧し、身だしなみを整えます。全てを終え、部屋を移動します。この処置の最中に、看護師は患者様に常に声かけをしていました。「寒くないですか。」「身体を綺麗にしますね。」など、普段と変わらないものでした。作業の内容をしっかりと学ぼうと思っていましたが、胸の奥から込み上げてくるものがありました。また、ご家族の方に「ありがとうございました。」と言われました。今までにない言葉のように聞こえました。うまくは説明できませんが、じーんと心に響く思いでした。そして、「ありがとう。」の言葉をこれほどにも重く感じたのは初めてでした。その後、師長さんから「エンジェルケアは、ご家族の元に温かいうちに患者様をお返しする看護師の最後のケアなのですよ。」と教えて頂きました。もう、怖さも不安も消えていました。看護師は最後の最後まで患者様に関われるということを知りました。そして、とても大切なケアなのだといいことにも気付かされました。

看護の仕事というものは、決して理想や憧れでこなせるものではなく、経験することによって今まで以上に理解できるものだと思います。綺麗事でもなく、上辺を飾ることでもない、本気で相手を思い、心から関わることが必要であること

も知りました。以前は理想や憧れだけで思い描いていた看護師という職業に対して、現在では現実の姿を見つめることが出来ます。

現場では、患者様に拒否されることもありますし、テキスト通りのことは全くと言っていいほどあり得ません。その人、その人の個別性が重要になってきます。「白衣の天使」といったイメージだけでは勤まらないことも沢山あります。しかし、私の持つ看護師のイメージは崩れていませんし、より強く確かなものに成長しつつあります。私も温かい気持ちを忘れず持ち続けることの大切さを、いつも感じていたいと思います。「ありがとう。」という言葉を患者様から頂いたときは心から喜びを感じます。ですから、結果として笑顔を見ることができ、「ありがとう。」という言葉を頂けるのです。患者様の満面の笑顔と、素直に喜んでくれる気持ちを忘れないで、これからも励んでいきたいと思います。

これから、さらに生きた学習を積み重ね、自分なりの看護観が見えてくるように努力していきたいと思っています。

病院実習で学んだこと

愛国高等学校 衛生看護科　三年
外山　亜利早

「コミュニケーションには、言語的コミュニケーションと非言語的コミュニケーションとがある」ということを基礎看護技術の授業で学んだのは高校一年生の頃でした。相手への伝達はこの二つの組み合わせで行われることが多く、「言語的コミュニケーション」の割合はわずか三〇パーセントに過ぎず、「非言語的コミュニケーション」の割合は七〇パーセントもあるということでした。私はこの意外な割合に驚きと疑問を抱いたのを覚えています。コミュニケーションは「言語」がなければなりたたないという考えが私の中で強くありました。そんな考えが大きく変わったのは、高校二年生の三学期の基礎看護実習の時でした。

一クール目を終え、二クール目は脳神経外科での実習でした。私が受け持った患者様は女性で「脳梗塞」を患っており、失語症でした。まず最初に挨拶をしにベッドサイドに行くと、患者様は涙を流しており、私の声にまったく反応しませんでした。私は、思わぬ反応にこれからどう患者様と関わっていけばよいのかがわからず、戸惑ってしまいました。ベッドサイドに向かう廊下では緊張のあまり足がすくむほどでした。私はまず、患者様と関わるにあたって基本になる「コミュニケーション」について再度学習し直しました。コミュニケーションは言語によって成り立っているという考えだった私は、失語症の患者様とのコミュニケーションに大きな壁を感じてしまいました。このままではいけない、自分の考えを変えようと思い、暗中模索しながらも、患者様のベッドサイドにより多く行くことにしました。そして積極的に話し掛け多くの話題を持ちかけましたが、話の途中で涙を浮かべながらため息をつかれてしまいました。ある日、私はご主人がお見舞いに来る時間になると、患者様はしきりに髪の毛を気にして直していることに気が付きました。同じ女性としてその気持ち

がよく分かり、私は毎朝鏡と櫛を持ち右片麻痺のある患者様に代わり真心を持って整髪を行いました。

数日後、朝挨拶に病室を訪れるとにこっと笑顔を私に向けてくださいました。「おはようございます」のあいさつに「おはよう」と心の中で答えてくださったような笑顔でした。私はこの瞬間に初めて「非言語コミュニケーション」の存在について理解することができたような気がしました。この挨拶をきっかけに、患者様の表情、目の動き、手の動作などを見ることによっていま何を患者様は訴えているのだろうか、どういう思いなのだろうかが少しずつわかるようになっていきました。言葉は声だけで発するのではなく、心と体でも発しているのだなとこのとき思いました。

受け持たせていただいている期間、私は患者様専用の言葉の練習カードを作り一緒に発声の練習を行いました。この練習を行っているときも患者様の心の声がわかりました。「今日は調子が悪いの」「話せなくてもどかしい」といったように言葉の練習を通して、言葉のいらないコミュニケーションがわかるようになりました。患者様は日を追うごとに簡単な単語を、話せるようになりました。

この発声練習を行って一番印象に残ったことは、患者様の笑顔です。カードに書かれたものを理解し、その言葉を発せられたときの患者様の笑顔は一生忘れることはないと思います。上手く発声出来たときは一緒に笑顔になって、喜んでいました。このとき改めて、普段当たり前のように無意識に行っている「声を発する」ということの大切さについて学ぶことができました。

三週間目頃からは、最初の日に抱いた戸惑いや不安は無くなっており、少しずつ患者様との信頼関係も結べるようになりました。そして、実習最終日。患者様のベッドサイドへ最後の挨拶に行くと、患者様は涙を浮かべて病棟中に聞こえるような大きな声で、

「いろいろありがとう」

と、言ってくださいました。この患者様から、言葉のない心の声の「ありがとう」と、練習をたくさんした音声のある「ありがとう」両方のありがとうをいただきました。私の「非言語的コミュニケーションが理解できない」という疑問を解決してくれたのは、教科書でもなく、参考書でもない、患者様でした。

そんな私が自分の話す言葉がほとんど通じない世界へと行くことになりました。夏休み中、一ヶ月間、アメリカに行き、英語だけの世界をホームスティで体験して来ました。最初の五日間は自分の英語が通じず、また相手の英語が聞き取れず、言語的コミュニケーションが全くできない状態でした。どうしようかと悩みましたが、実習時に患者様から学んだコミュニケーションには言語だけではなく非言語的コミュニケーションもあることを思い出して、顔の表情や見ぶり手ぶりなどの体の動きなどで相手に意思を伝えることが出来ました。病院実習前の私だったら、こういった行動を起こせなかったと思います。ここでも、非言語的コミュニケーションの存在について学び得るものがあったと思います。

「言語的コミュニケーションと非言語的コミュニケーション」の割合は三対七と意外なものだったのですが、患者様に

触れ合うことでそれを理解し学ぶことができました。コミュニケーションは人にとってとても重要なことであり、切っても切り離せないことだと思います。その方法は言葉を発するだけでなく、表情や動作もコミュニケーションの一部だということを学びました。私は実習中患者様と触れ合ったことによって、「コミュニケーション」とは、意思や出来事の伝達だけではなく、人と人との心の触れ合いの上に成り立つものだということを感じました。これから看護の道を目指していく上で、心の触れ合いを大切にしていきたいと思いました。

私に足りなかったもの

愛国高等学校 衛生看護科　三年
武山沙希衣

私が看護師とい職業を選んだ理由は三つあります。一つ目は、幼い頃に見た看護師さんの明るい笑顔と優しい言葉に憧れ「私もあの看護師さんのようになりたい。」という気持ちを抱いたこと。二つ目は、テレビで見るドラマやドキュメンタリーの中での看護師としての職業に強い関心を持っていたこと。三つ目は、私にとって大きな節目となった祖父の死でした。

一つ目の理由は幼い、小さな子供なら誰もが思い、誰もが憧れを抱き、将来の夢として看護師をあげるには十分な理由だと思います。私もその一人でした。しかし、日が経つと共に「あの職業も良いな。」と子供ながら沢山のことを考えたものです。そしていつしか胸の奥深くへ消え去っていきました。小学生になって、ある日、再度私の胸に看護師になりたいという気持ちが目覚めました。それは二つ目の理由のテレビでした。テレビで見る看護師という、人の役に立てる職業、そして何より沢山の人々と出会い、別れを体験しながらも、一人一人と深く関わり、その人の為に全員が協力していくというところに強い魅力を感じていました。では、何故私は看護師とい職業を本格的に将来の夢にしたのでしょうか。それには祖父の入院、そして死という悲しい出来事がありました。当時小学生だった私は、入院しベッドに横になっている祖父に何もする事が出来ませんでした。そして、何も出来ないまま祖父はこの世を去りました。私は、何故あの時、祖父に優しい言葉一つも掛けてあげられなかったのだろうか。そんな思いを抱き、私は、看護師という道を選びました。

そして、祖父に出来なかったことを、違う人々の為に役立てたいと思い、衛生看護科に入学しました。入学して、机に向かう勉強や校内実習、戴帽式を終え、次はいよいよ臨床実習へと進みました。

私が受け持たせて頂いた患者様は数日後に手術を控えた女性の方でした。手術は子宮を全部取ってしまう「腹式子宮単純全摘術」というものでした。その為、子宮を取ってしまうことから、女性らしさが失われてしまう等の不安を抱える場合があります。私の患者様は特に手術に対する不安もなく、笑顔で手術を迎えられました。しかし問題は手術後でした。手術後というものは、体内にバルーンといった管を入れていたり、点滴をしていることが多く、その為、移動の際は点滴

棒を押して歩かなければいけません。例えば、食事を取りに行く際ももちろん点滴棒を押して行くので病室に戻る時には、右手に片手では不安定な重さの食事を持ち、左手では点滴棒を押すといった大変な作業をしなければいけません。患者様がこんな大変な思いをしているとは思ってもいなかった私は、看護師さんから話を聞くまで気付く事が出来ませんでした。気付いた時にはもう遅く、その患者様は点滴棒がいらないくらい回復していました。このように、患者様が入院生活中に困っていることは患者様や看護師から教えて頂き気付くのではなく、自ら進んで「そういえばあの患者様、点滴棒を押しているのに食事はどのように運んでいるのだろうか」という疑問を持つようにしたいと思いました。患者様、特に衣食住に関してはその患者様の置かれている状況や環境についてきちんと把握し、その患者様の立場になって考え、看護というものをしていかなければいけないなと気付くことができました。

それともう一つ。私はこの実習中にまた同じような失敗をし、自分に足りないものに気付くことができました。

今度の患者様は下痢や貧血の症状を抱えており、その原因を調べる為に入院していました。原因がわかり次第手術の日程を決めるといった患者様でした。そこで私は、この患者様に対して次のような目標を立てました。それは「不安のある患者様に対して、不安の表出を図り不安の軽減を行う」というものでした。私は少しでも不安を表出してもらうことによって、患者様に気を楽にしてもらいたかったのです。しかし、私は、この目標にとらわれ過ぎてしまいました。患者様を受け持たせて頂いて数日後の事でした。検査の結果から原因がわかったのです。医師から家族を含め原因についての説明がありました。下痢と貧血を起こさせていたのは癌だったのです。この医師から説明があった翌日、私は患者様の気持ちをいつものように聞き出そうと計画を立ててきました。しかし、看護師さんからこの計画についてストップがかかりました。理由はこうでした。告知の次の日というものは、心の整理がつきづらくて、いろんな事を考えるものだと教えて頂きました。また、いろんな事を考え、悩んでいる最中に自分の気持ちなんて聞き出されたくないものだと教えて頂きました。確かに、私がもし今日癌だと知らされたら、昨日の今日で心の整理がつく問題ではないと思い至りました。私は実習ということで必死になりすぎてしまい、一番に考えなくてはいけない患者様への配慮、患者様の気持ちを無視していたのではないかと反省しました。

私はこの二つの間違い、失敗から自分に足りないのは、いつ、どんな時でも相手の立場、気持ちになり、思いやりをもって、その患者様と接するという気持ちだと思います。この気持ちを忘れず残りの実習も頑張っていきたいです。

そして、あの時の祖父の気持ちになって考えてみると、やはり、孫の元気で思いやりのある一言が聞きたかったのではないかと思います。

働く喜び

愛国高等学校 衛生看護科　三年
鳴　島　　愛

昨年の冬、以前から母が加わっているボランティア活動に参加することになりました。めったに経験できるような事ではないからと勧められたので、とにかく母について行く事にしました。行ってみて驚きました。今まで私が経験したボランティアは街の掃除、老人施設での介護のお手伝いなどでした。今回はというとホームレスの人達への支援援助でした。その内容は次のようなものでした。パンやお米、スープやカレーなど食事を提供したり薬や絆創膏を配布したり、健康チェックの一つとして血圧を測定したり、日頃気になる健康状態の相談を聞いたりなど色々な援助がありました。

正直な所、ホームレスの人達を対象としたボランティアだと知った時、私は尻込みしてしまいました。人を見かけだけで判断してはいけないのだと頭では解っていましたが、どうしても恐いといイメージが先行してしまいました。母は私が中学生の頃からこのボランティアに参加していたとの事で、一～二ヶ月に一回の割合で各地区をまわって活動を行ってきたそうです。

今回は池袋にある大きな公園を訪ねました。そこには、五十人を超えるホームレスの人達がおり公園の周りにダンボールで小さな家を作って生活していました。そうでない人達は駅やトイレの中で寝泊りをしているようでした。中央にはボランティア活動を手伝う大学生や医療に携わっている医師や看護師、食事を作る活動委員の方達がテントを三個立てて集まっていました。テントの中では、大きな鍋を四個も火にかけてスープを作っているようでした。これは今日ホームレスの人達に配るものだとすぐに気づきました。ただ、この日は東京では初雪が降り、とても寒かったため公園には肝心のホームレスの人達の姿がありませんでした。それはそうです。この時の気温は、氷点下二度。ボランティアとして集まった人達も大変でした。

しかし、せっかくボランティア活動をする為に来たのだからやり遂げようと皆で決め、彼らがいそうな駅の構内、コンビニの中、図書館などを捜し声をかける事になりました。二十分もしないうちに大勢の人達が公園に集まり、あっという間に公園はホームレスの人達で一杯になりました。早速、看護師の資格を持つ母と看護学生である私は医療の手伝いを任されました。擦り傷があれば消毒をして絆創膏を貼ったり血圧測定をして体調を聞いたりしました。その中、医師や看護師は体調の良くない人の診察を始めました。その時、そこでの診察を観察していて驚いた事がありました。それは医師や看護師のホームレスの人達に対する接し方がとても丁寧で優しく、一人の大切な患者様として触れ合っていたということでした。それに応じてホームレスの人達も医師や看護師の質問に素直に答え、真剣に話を聞いていました。そして用が済むと、一言「ありがとう」と言い笑顔で帰っていきました。その姿が今でもよく思い出されて印象強く残っています。医師や看護師の態度からは心から人を助けたい、という気持ち

で業務を行っている事が感じられました。それに対し妙な思い違いをしていたのはどうやら私だけだったようです。私は一体、何を考えていたのだろう。さっきまで私は大変な過ちを犯していたことに気づき、とても後悔しました。それからは私も積極的に彼らに話をかけ、色々な話を聞いたり、冗談を言い合い一緒に笑い合ったり沢山のコミュニケーションを行うことが出来ました。

そうしているうちに一人のホームレスの方が診察の為にやって来ました。その方の顔色は悪く、明らかに今まで診察をしてきた人達と様子が違う為、看護師が直ぐに駆け寄り椅子に座らせました。母がその人の血圧を測ると、かなりの低血圧だったので医師に報告しました。看護師は今の気分や状態、いつ頃から具合が悪いのかなどと色々細かい事についても聞いていました。話によると、この人は半年前から吐血を繰り返しており毎日のように胸やけや貧血、発熱を起こしていたようでした。顔色は土色で体は痩せこけていました。温かいスープを勧めても「今は食べられない。」と食欲がない様子で辛そうにしていました。一通りの診察が終ったところで医師は話を始めました。「この状況のままではとても危険です。今すぐに病院へ行きましょう。もしかしたらすぐに入院になるかもしれません。よろしいですか。」どんな病状なのかは一目瞭然だったのだと思います。その後、そのホームレスの方は救急車で運ばれていきました。

病名が何か気になり、看護師の方に伺ったところ「肝硬変」という事でした。肝硬変というのはアルコールの過剰摂取が原因で発病する事が多く、肝臓の中の血液循環が悪くなり肝臓がかちかちに固まってしまう病気です。このような状態のまま半年も我慢をしていたなんて気の毒な事だと思いました。しかし今回の活動によって大切な命を救う手助けが少しでも出来たかと思うと、今回のボランティアに参加する事ができて、とても幸せだと思いました。そしてまた、困っている方達の役に立つ事、働く事の喜びを実感することができ、これから看護師になるにあたって貴重な経験となりました。

人々のために働く

岩倉高等学校　機械科　三年
大橋　俊也

高校三年生になった私は今、進路を選択する重要な岐路に立っている。私は就職して、社会人として頑張っていこうと決めたのだが、ふと、働くとは何だろう、社会に出るとは何だろうと思った。今まで真剣にそんなことを考えたことがなかったし、なんとも素朴な疑問に、私は、私自身への問いに、すぐに明確な答えを出せなかった。

学生生活が終われば、みんな社会人として働きに出る。どんな仕事に就いて、どんな生活を送っていくのか。自らの意思で、将来を決定していく。みんながそれぞれの道を歩んでいく。そして私も、私だけの将来を決定していかなくてはならない。ただその前に、働くということ、社会に出ること、加えて私に何ができるのかについての答えを出す必要がある。そして、その答えが今後の私の仕事や人生を生きていく上で

の重要なヒントになるのではないかと思った。

貧困や飢餓、病に苦しむ子どもたちがいる。日本で暮らしている私たちには、なかなか想像しにくいかもしれないが、世界中には、助けを必要としている子どもたちがたくさんいるのだ。そして、そんな子どもたちのために、募金を集め、食糧や学用品を提供したり、病院や保健所をつくって看病している人たちがいる。小さな命を救おうと努力されている方々の姿に私はとても心を動かされた。世界中の子どもたちが平和に、そして健康に暮らせることを祈って活動されているその心が、とても美しく見えるのだ。

また、もっと身近なところでは、自分の住んでいる地域の環境をよくするために、ゴミ拾いなどのボランティア活動に積極的に取り組んでいる人たちもいる。私も地域の美化活動に参加したことがあるが、無償で、みんなのために働いていくということの大変さを感じた。しかし、そのときに得られた仕事に対する充実感を忘れることはないだろう。それだけやりがいのある仕事であったし、重要な役目を持っていることに気づかされたのだ。この体験は、私にとってとてもいい勉強になったのではないかと思う。そして、人々のために仕事をしていこうという強くて温かい気持ちを持って働いていくことが、自分にとっても、社会にとっても、いい影響を与えていくのではないかと思った。

しかし、全ての仕事がそうとは限らない。稼ぐこと、利益を上げることに全力を注いでいる人がいれば、初めから仕事の内容よりも、とにかく儲けの多いことだけで仕事を選ぶ人もいる。もちろん、それが絶対的に悪いことだとは言わない。自らの努力で得たお金を自由に使うことに何の問題はないが、高級自動車に乗ること、高級マンションに住むというように、自分へのご褒美に重きをおいていることに、私は、寂しさを感じることがあるのだ。

仕事をすることの根本は、働いて収入を得ること。しかし、それで終わってはいけない。自分が働くことによって、人々に喜んでもらうこと、心と心のふれあいと、人間同士のやさしさを得ることが、何よりも重要なのではないかと思う。そして、私の将来も、人々のために、役立つ仕事に就きたいと思う。先日、就職のため、ある旅客業を主とする企業の会社説明会を尋ねてみた。その会社のお客様を思う気持ちと、人々のために働いていくことへのやりがいと誇りを持って働いていらっしゃることを知り、とても感銘を受けた。実際に仕事の説明を受けて、働いていくとはどんなことなのか、改めて教えてもらった気がする。そして私は、その企業に就職することに決めた。人々のために働いていくことの責任を感じながら、充実した社会人生活を送っていきたいと思っている。

人生の正念場

岩倉高等学校　機械科　三年
加藤　隼人

都内の私立高校に通い始めて二年半が経つ。私はもうすぐ人生の岐路に立つ。

私には子供の頃から思い描いている将来の夢がある。それ

は、電車の運転士。子供っぽい、と言われる事もあるが、私は将来の目標として至って真面目に捉えている。そもそも私が鉄道業界を目指すのは子供の頃のある出来事が原因である。

それはまだ私が幼い頃の話で、当時、小学校に入る前か、小学生の低学年の時か、よく覚えてはいないのだが、近くの大きな街に出掛ける用事があって、電車に乗ったときの話だ。私はその日、親に連れられて電車に乗っていた。大きな街までは最寄り駅から十五分ほどではあるが、駅を発車して二分もしないうちに次の駅に着く電車に、私は飽きていた。

ある駅に着いた時、一人の女性が乗車してきた。その女性は車椅子に乗っていた。私の知る限り、車椅子の乗客が鉄道を利用する場合には、駅のホームと車両間に隙間があるため、専用の携帯型折りたたみ式スロープのようなものを車両とホームの間に渡す。ハンドル型電動車椅子を利用の場合には事前に鉄道会社へ連絡が必要な場合もあるようだ。この女性も例外では無いようで、付き添いの駅員が専用のスロープを車両とホームの間に渡し、電車に乗った。その際、女性は駅員に対し、しきりに礼を述べていた。そのときの駅員の言葉を覚えている。「いえいえ、とんでもございません。道中お気を付けて、いってらっしゃいませ。」当時私は小学生だった。でも、とても感動したことを覚えている。今となっては当たり前なのかも知れないが、そんな日常的なありふれた事にも全力で取り組む姿勢に私は惹かれたのかもしれない。電車のドアが閉まり、電車はまた動き出した。

私は東京都内の岩倉高校という高校に通っている。この学校は、全国でも二校しかない鉄道の専門科目がある高校の一つで、卒業生には鉄道のプロフェッショナルも多く、鉄道業界では有名な高校である。私は機械科に所属しているが、鉄道専門のコースも存在する。一年次は鉄道の科目は無く、機械実習や工業系の基礎を学んでいく。二年次になると、鉄道コースと自動車コースに別れ、専門的な知識を深めていく。三年次はより専門的な学習となる。授業は科目数が多く、実習も多く、飽きる事がない。鉄道コースには学校内にあるシミュレータを使用しての運転実習もある。カリキュラムが充実しており、効率的に学習できる。

私が思うに、鉄道会社などの陸運業というのは、社会的貢献がとても高い業種と言える。考えてみて欲しい。今この日本から鉄道網が消えたらどうなるだろうか。毎朝通勤時間帯になると首都圏の鉄道は軒並みギュウギュウ詰めの満員電車になる。その輸送分をマイカー・バスなどで補うとすると、道路は軒並み渋滞し、時刻通りにバスは来ない。おまけに満員で乗れないから次のバスを待ってくれなんて言われた日にはたまらない。遅刻なんて日常茶飯事。定時に出勤できる社員は少ないだろう。そう考えると鉄道の輸送力は計り知れないのである。日本の経済は陸運業が無ければ成り立たないと言っても過言ではない筈だ。これもまた、私が鉄道業界を目指す理由の一つでもある。社会貢献が出来るような仕事をしたいとも考えたし、人の役に立てて、感謝されるような仕事をしたかった。さまざまな要素で考えた結果、鉄道業界への就職が最善と考えたのである。

幼い頃の出来事が元で鉄道業界を目指している私だが、もうすぐ就職試験が迫っている。私は先にも述べたように、鉄

道会社を第一志望とした就職を希望している。幼い頃見た、夢を、現実のものとするためには、今を頑張って、乗り越えなければならない。そう、今が正念場なのだ。

生きる事

武蔵野東技能高等専修学校　三年
田村雄人

命とは、生きるとは一体どういう事なのだろう。このことが頭の隅にこびりついていて何度も何度も真剣に考えている。これについて悩み始めたのは高校二年の時だ。担任の先生から病院でボランティアをしてみないかと持ちかけられた。もともと医療か介護の道へ進もうと考えていたので参加することにした。

職場体験の当日、緊張と不安が入り混じる中、受付で職員の人に挨拶をし、そこからボランティアが始まった。何度か介護老人保健施設や特別養護老人ホームを見学していたので、こんな感じだろうと予想していたのだが、病院は別だった。雰囲気が違うのはもちろんだが、何より一歩踏み外せば命がなくなってしまい気が抜けない。介護助手として体験するということもあり一つ一つの動きで迷った。しかし、迷った分、私にとってプラスになるものが多くあったように思う。清拭の基本的なやり方、服の着せ方など今の私にとってよい体験となった。そして、何より職員の姿勢が勉強になった。丁寧かつスピーディーに、無駄な動きがまったく見られない。どうしたらこのように動けるのだろう。驚きと好奇心が生まれた一日だった。

二日目は病院内を見学した。患者さんの大半が寝たきりで、話すこともできず、常に呼吸器をつけている。明日、死んでもおかしくないという状態で苦しい表情。今まで命に対して真剣に考えようともしなかった私にとってこのボランティアは衝撃だった。そして、一つの目標ができた。それは看護師になる事だ。今回のボランティアは私の人生観を変えるものとなり、命について深く深く考えさせるきっかけとなった。

すべての命を救えるわけではないが少しでも病気をよい方向へ結び付けたいと日を重ねるごとに思いが強くなってきた。そして夢に対して少しでも近づきたい。何かやれる事はないかと考えた。私は考えをめぐらすまではよいのだが、行動に移すことができないタイプの人間であった。しかし、今度こそは、ためらってはならないと感じ、職場体験でお世話になった病院に連絡をした。院長先生に看護師になるための勉強がしたいという意思を伝えると、こころよく引き受けてくれ、そこから私の進路が開けてきた。今までただ漠然と生活をし、夢もなかった私が夢を見つけられた。うれしいと思うと同時にがんばろうと何度も独り言のようにつぶやいた。自分の天職を見つけた喜びだった。

毎週土曜日と日曜日は病院でインターンシップをすることになった。仕事の内容はボランティアの経験もあって、少しだけわかっていたのだが、迷う部分が多くあった。一つは専門用語の理解である。気切、カニューレ、イルリガートル、ファーラ位、ＩＶＨ、すべてが無意味な音声のように聞こえ

て何がなんだかわからなかった。そして、一番困ったのがコミュニケーションの取り方だ。初対面の人と話すのが苦手な私は自信がなく患者さんに不安を与える事が多かった。しかし、回数を重ねると、自信がつき積極的に話せるようになった。そして、あることにも気づいた。それは何に対しても自信を持って行動する事が大切だということだ。インターンシップを始めてまだ数日しか経っていないので動きに戸惑いがある。しかし、患者さんに不安な動きを見せるわけにはいかない。こんなにおどおどした私を見たらどう思うだろうか。きっと不信感でいっぱいになるだろう。失敗するのは恐くて嫌だが間違わない人間はこの世に存在しない。天才は一％のひらめきと九十九％の努力という言葉があるが、本当にその通りだ。人は経験と練習、失敗を繰り返して成長していく。だから笑顔と大きい声で自信を持ち患者さんと接していくのだとインターンシップを通して感じた。

悩んでいるとき声をかけてくれた人がいた。そんな時仕事は回数を重ねれば重ねるほど技術が上達していく。続ける力と努力があればどんな困難も乗り越えていける。努力は君を裏切らない。そんなにあせらなくてもいいよ。わからない時はすぐに聞きなさい。この言葉に励まされ、救われた。それは、驚きでもあった。今までこれほど私を見てくれる人なんていなかったからだ。会ってまだ数日しか経っていないのに元気づけてくれた。こんな人と人との交流もある。インターンシップで多くのものを感じることができた。

今回の職場体験で勉強になる事が多くあったが、悲しく辛い出来事もあった。一体、私がインターンシップに関わっていた間にいくつの命がなくなっただろう。遺体を見送ったのは何人だったか、数え切れない。こうしている間も一秒刻みで命が消えている。死というのは人間や動植物が避けることができない。さっきまで元気に話をしていたのに今はもう動かない。とても悲しくて寂しかった。

それは、許せないことでもあった。それは、私が死に対して慣れてしまったことだ。死亡退院されました。この言葉を何度聞いただろう。本当に何度も何度も聞いた。悲しいことなのに心が動かなくなっている自分自身に気がついた。こんな自分が嫌になる。命を軽く思ってしまう私はおかしい存在だと考える時もあった。辞めた方がいい。この現場は相応しくない。しかし逃げていいのか、と自分自身に問いかけると、やりたい、今ここにいたいと心が答えてくる。そして、命をかけて医療に携わっていこうと再び決心した。

これから私は看護師になるため専門学校へ進学する。そして、学校に通いながら病院で勉強していこうと考えている。今の私には難しいハードルかもしれない。しかし、できるかどうかでなく、なりたいから看護師になるのだという決意を忘れず努力し夢に近づきたい。そして、命の重さを感じ取れる人間を目指していこうと思う。

簿記を学んで

東京経営短大村田女子高等学校　商業科　三年
金田　静香

現在、私は商業科目を学んでいる。たくさん学んでいるが最も簿記に興味をもっている。私が簿記を学びたいと考え始めたのは中学三年の夏である。

あの年のある日、こんなことがあった。自宅のすぐ近くに新しいスーパーがオープンした。私はそのお店に興味本位で立ち寄ってみた。オープン初日で店の中はたくさんの人で賑わっていた。それもそのはず、多くの品物が通常より大幅に安く売られていたのだ。私も早速いくつかの品物を買い、帰路に着いた。その時、私は「あのお店はこれで儲かるのか。」「どのように経営が成り立っているのか。」疑問に思ったと同時に、経営の複雑さと多様な経営戦略に興味を持った。そして、あらゆる企業経営の基礎となる簿記や会計について詳しく知りたいと思い、現在簿記の学習をしている。

私たちが日常の生活で消費したり利用したりする製品や商品、交通、電話などのサービスを生産し、販売しているのは企業である。こうしたビジネスの諸活動を円滑に、また効率的に行うには、製品や商品の仕入れ、販売代金の回収などを組織的に記帳した記録が不可欠である。それなしには、経営活動の善し悪しを判断することはできない。このように企業の日常発生する取引を、一定の方法で記録・計算・整理して、経営成績と財政状態を明らかにするのが企業の簿記である。

私は簿記の勉強をすることを苦痛に感じたことは一度もない。なぜなら簿記の知識があると日常生活の様々なことが分かるようになるからだ。最も身近で分かりやすいものは家計簿である。私の母は毎日家計簿を付けている。昔はそれを見てもよく分からなかったが、今は家計簿を見ると、収入と支出のバランスを把握することや、改善すべきところを見付けることができる。身近なところで自分が身に付けた知識を生かせるというのはとても楽しいことであり、勉強する意欲が自然に湧いてくる。

簿記の勉強を始めて、もうすぐで二年半になる。その中で色々な知識を身に付け、様々な帳簿の記帳方法を学んできた。しかし、私が知っているのはほんの一部であり、もっと多くの知識を身につける必要があると思う。だからこれからも勉強し続け、簿記のしくみを十分に理解し、企業において日常発生する取引を合理的・能率的に記帳できる能力を習得したい。さらに、作成された帳簿や、企業の経営成績を明らかにする損益計算書、財政状態を示す貸借対照表といった財務諸表を通して、ビジネスの諸活動を計数的に把握できる能力を身に付けたい。そしてそれを基礎として、将来は公認会計士になりたいと考えている。

公認会計士が行う業務の中に、コンサルティング業務がある。コンサルティング業務は、クライアントの企業が抱えている問題に対して、専門知識を活用し、解決策を提案・実施する仕事である。この業務において、公認会計士が力を発揮する分野は、主に財務分析だ。私は、企業が作成した財務諸表の数値を時間軸や同業他社等と比較し、企業の強みや弱み

を明らかにし、経営意思決定に有用な情報を提供したいと思う。

公認会計士になるのはとても難しいことであり、辛い道のりだと思う。しかし、絶対に公認会計士になるという強い意志を持って努力し、自分の夢に向かって一歩ずつ前進していきたい。そして立派な公認会計士になり、日本経済の土台を支え、社会に貢献していきたいと考えている。

キャンパス

東京経営短大村田女子高等学校　商業科　三年
東　平　成　加

特に思うことも無く、薄っぺらい毎日が、当たり前な毎日が私を追い越していく。好きな演劇をやって、好きな絵を描いて、そして好きな友達と思い出を作っていた。絵を描くことは特に好きで、毎日いつだって絵と隣り合わせでいた。「何でそれについては飽きないのかねぇ」と、よく言われたりしたけれど、それが私の唯一の特技とは、決して胸を張って言えるような事ではなかった。それが中学生の時の私だ。

中学三年生になると、高校進学のために自分を整理せざるを得なかった。特技は美術。長所は最後まで頑張るところ。夢も一応事務的に纏めたが、全てが嘘だった。まるで自分自身が嘘のようだ。絵すら「唯一続いている私の特技です」で終わっていた。「これが無かったら空白なんです」

平成十六年に現在在学の高等学校に入学。この学校の「Yes I Can ～何かができる私になれる～」と言う言葉が私の関心を引いた。

今の私は高校三年生だ。もう高校三年生なのだ。中学生としての三年間よりももっと遥かに色濃いもので、そして今の私は淡いけれども多色多彩に描いた。

合格検定数約十四種類。一級合格約七つ。合格検定の中でお気に入りなのが、全国商業高等学校協会主催の簿記検定一級と文部科学省認定秘書検定二級だ。数字がお気に入りなのではない。その過程がお気に入りなのだ。これらの検定が合格と知った時の喜びは、きっと一度しか味わえないものだけれど、だからこそ深く私の記憶に焼きついている。

学問について初めて悔しさを覚えたのは、入学して間もない簿記の期末考査だった。友達は満点を取ったのに私は九十八点。悔しくて悔しくて仕方が無かったのを今でも鮮明に覚えている。それからは簿記のテストではなるべく満点を目指したものだ。そして、満点を取った暁には簿記の魅力にどっぷり浸かって「にやり」と笑う私がいた。魅力というものは、今まで積み上げてきた己の能力を最大限に使い、そして一つの作品を仕上げた自己満足。私の目を見て「上手だね」と褒めてくれる感覚。私を定義付けてくれる。とても似ていた。だからその時の私はそういった意味で簿記が好きだった。だから勉強した。中学生の時の学問では感じられなかった喜びが、純粋に今では白い画用紙に描ける。そしてそれが簿記を学ぶ出発点だったのだ。

それからというもの、簿記科を選択して更にステップアップした。簿記クラスの人たちと教えあったりした。検定前に

は放課後遅くまで残り、一人で悩まないで皆で悩んで、私はそうしながら新たに学ぶ楽しさを覚えた。ただ単に答えを見て納得するより、何故そのような答えになるのかと頭を捻り、友達と四苦八苦しながら出した答えの方が楽しく、満足感が大きいのである。もしも自分の提案した考えが的中したならば、心の中で拍手喝采である。そうしてやってきた問題はメモを取り全てストックした。

こんなにも楽しんで勉強したことが今までにあっただろうか。学ぶことに楽しみを覚えて、そうして悩むことに胸を躍らせる自分がいたのだ。

後に全国商業高等学校協会主催の簿記検定一級は合格という形で幕を閉じた。だが、簿記の本番は幕を閉じた先にあった。私は新たなステージで色を失う。

日本商工会議所の簿記検定二級は苦痛と焦りの毎日だった。二ヶ月間という限られた時間の中で、大学進学を賭けた一戦に挑まなくてはならなかったからだ。あまりにも狭い空間の中では、全ての人が敵に見えた。その結果、自己満足の軌跡を歩んだだけで終わってしまった。周りからは「やっぱり」という目で見られている様な気がした。そして自らさじを投げた。

よく先生に「理屈ばっかり。言い訳ばっかり」と言われる。そうかもしれない。私は昔から自分を定義付けないと自分でいられないと思っていた。しかし簿記はその為に学んでいたわけではない。出始めはどうであれ、ただ単に本当に楽しかった学びたいと思ったのだ。言い訳もしたくなる。理屈も付けたくなる。それは初めて味わったときの悔しさと同じ位悔しかったからだ。私はこの考えに辿り着くと同時に、素直にそのままの自分を見つめられるようになっていた。

私は将来、簿記関連で人の役に立つ仕事に就きたいと思っている。財務関係で困っている人に、培った能力からなる私の最大限の計画設定を提供するのだ。そしてそれが成功ならば拍手喝采だ。

これからは、簿記のステップアップと視野を広げるために大学進学を目指そうと思う。もしも白い画用紙に沢山の色が重なって、そして黒くなってしまったのなら、まだまだある白い画用紙を満遍なく沢山使おうと思う。

私の高校生活

安田学園高等学校　電気情報科　三年
福　永　光　太

私が安田学園高等学校電気情報科に通学することになったのは、第一志望の県立高校に落ちてしまったためです。

当時、安田学園のことを知る前は、第二志望として埼玉県内で情報技術科のある私立高校を探していました。しかし、県内では気に入った学校がなく、第二志望の学科としては情報処理科を考えていました。今通学している高校を知ったのは中学三年生の頃のことで、私の通っていた塾が開催していた学校説明会の時のことでした。志望校の面談の時間を待っている間に見つけたのですが、都内にある私立高校ということで、あまり考えていませんでした。しかし、話を聞いてい

るうちに、それほど私の家から登校するのに時間がかからないことを知り、何度か高校を見に行ってみて、第二希望として今の高校を選んだのです。

その頃、私が学びたかったことは、パーソナルコンピュータの操作方法や情報メディアの動画やアニメーションの作り方でした。

しかし、高校のカリキュラムにはパソコンの勉強だけではなく、電気や電子機械の勉強なども含まれていました。その頃は、なんでこんなものをやらないといけないのだと思いながら授業を受けていたことをよく覚えています。抵抗や電圧を求めるための単純な公式でさえも覚える気さえありませんでした。私は自分の好きなことや興味のあるものだけを覚えておこうと考えていました。

そのような考えが変わったきっかけとなったのは、二年生の時に二人一組で出場する東京都高等学校電気工事技能大会に出てみないかと、私の担任の先生に薦められたのが始まりでした。それから電気工事の大会に出るべく練習しました。二年生の頃は課題の回路の仕組みを覚えるでもなく、淡々と作業をこなすことしかできませんでした。今になって考えてみると、こんなものは分からないと諦めて、覚えようとしなかっただけなのかもしれません。

大会のことに関しては、東京都高等学校電気工事技能大会よりも電気工事士技能競技大会の方が印象に残っています。東京都の大会では、時間内に作業を終わらせることができずに、電気工事士技能競技大会に出場することはできませんでした。私が大会に行くことができたのは、一緒に出場したもう一組が東京都の大会で良い成績を残し、電気工事士技能競技大会に出場するということで付き添いとして、見に行くことになったからです。

この大会と東京都の大会との違いは、電気工事士の資格を持った大人が出場する大会ということで、高校生が二人で行う作業を一人でこなします。作業が早い人では私たち二人よりも早く作り終わってしまう人もいます。早いだけではなく、できあがったものはとても丁寧に作られていて素直に驚きました。他には、電気工事士の大会では直に電気工事士の人達が作業する所を見ることができ、私たちの家の電気回路がどのようにして作られているのかがよく分かりました。

電気工事士の大会を通して学んだことは、自分の知らない技術がたくさん集まって今の生活が成り立っているのだということです。そして、もっと電気についても学んでみたいです。

今後、私は、自分の生活がどのように作られているかを知り、もっと豊かな生活を送るための技術を開発できるよう、勉強していくつもりです。